TOPICS

#06

研究者としての国際化

福島県立医科大学 薬理学講座 主任教授

下村 健寿

国際化という言葉が頻繁に聞かれる。日本で基礎研究に携わっていても「世界に負けない研究」であるとか「研究における国際化」などという言葉をよく耳にするようになった。しかし、この声高に叫ばれる「国際化」とは何か？　なにやら抽象的な概念のように用いられているような気がするのは私だけだろうか？

私は2004年から８年間にわたり、英国オックスフォード大学の生理学講座で研究生活を送った。日本とはまったく異なる西洋人の研究環境に長い間、身を置いた。日本人とは異なる彼らの感覚をここで紹介することは抽象的なものではなく「リアルな国際化」についての知見になるのではないか、と考え、ここに考察してみた。

私が所属していた研究室は国際色が大変豊かだった。スタッフの出身国はというと英国はもちろん、ドイツ、スロバキア、ウクライナ、ロシア、アメリカ、フランス、イタリア、ラトビア、南アフリカ共和国そして８年間を通して日本人は私だけだった。

われわれは「研究をして論文として発表する」という共通の目的をもってはいたが、そのスタンスが異なっていた。私がこれを最も顕著に感じたのは「宗教」という側面においてだった。日本人は宗教について非常に寛容だ。クリスマスを祝い、正月には神社に行く、死ねばお寺で葬式を挙げる。八百よろずの神を信じるというのか、すべてに神が宿ると感じるセンスを有している。そのためか、日本人の私は実験をするときには「科学研究」と「宗教」は相いれない、と割り切って考えて

いる（その一方で重要な実験をしている時には「お願いだからうまくいってくれえ」と祈っているのだから、私も適当である）。

英国やスロバキア出身の研究者は宗教に関するスタンスをはっきりと「無神論者（atheist）」と宣言していた。英国にはこの「無神論」の考えを前面に押し出して主張する人が多いように感じられた。カトリックでもない、プロテスタントでもないイギリス国教会の信者が多いことが関連しているのかもしれない。フェイクドキュメンタリースタイルのコメディードラマ『Office』の主演と監督を務め、英国ドラマ界に革命を起こしたリッキー・ジャーヴェイスは自ら「無神論」であることを公言していた。ジャーヴェイスはさらに『Invention of Lying（嘘の発明）』と題する映画を製作し、「嘘という概念が存在しない」架空の世界で、思わず「嘘をついてしまうこと」によって「嘘」という概念を発明した結果、その世界で神となってしまう男の姿を描いた。これは「宗教」が「嘘」によって成立している、という極めてトリッキーなメッセージを込めた問題作として話題になった。

一方、カトリックの国、イタリアから来た研究者はどっぷりとキリスト教に染まっていた。彼は「無神論」の研究者を「受け入れられない」と主張し、日本人の私はキリスト教徒でないから「不幸になる」と予言（？）していた。まったく大きなお世話だ。そんなキリスト教の熱心な信者である彼が「科学研究をする」ことは矛盾のようにも感じられる。しかし、彼の主張は一応、理に適っていた。彼は自分が科学研究をする理由を「神の起こした奇跡、御業を科学という窓を通してみるのだ」と説明していた。

日本人研究者が「国際化」という時には、どうもアメリカやヨーロッパに負けない研究を、という大雑把な解釈に基づいているように思えるが、彼ら / 彼女らの背景に切り離すことのできない「宗教」という要因があることを忘れてはいけないと思う。

「宗教」という概念に基づく視点をもっておくことは日本が真の国際化を目指すうえで非常に大事だ。ときにこの視点を通じてみることで、物事のまったく新しい真相や局面が見えてくることもある。

近年、その一挙一動が日本でも大きく報じられるのがロシアのプーチン大統領だ。日本では懸案の北方領土問題との兼ね合いでプーチンを国際外交という側面から論じられることが多い。しかし、彼の行動を「宗教」という側面から見ると、したたかな国際戦略が見えてくる。日本ではほとんど報道されていないが、私が気になるのはプーチン大統領のアトス山訪問だ。アトス山はギリシア北東部のエーゲ海にそびえたつ山だ。ここはキリスト教の正教会の聖地であるとされ、切り立った山の頂で修道士たちが外界から切り離された形で共同体として祈りの生活を送っている。

当然、このアトス山に行くのは容易なことではない。ヘリコプターによって山頂に降り立つしかない。プーチンは2001年と2004年にヘリコプターでのアトス山訪問を試みたが悪天候に阻まれ失敗に終わっている。そして2005年についに訪問に成功している。な

ぜ、彼はそこまでしてアトス山を目指すのか？　それはロシア正教会を有するロシアのリーダーとして、同じく正教会の聖地であるギリシアのアトス山を訪れることで、ギリシアとのつながりを演出したいからだろう。ギリシアの財政破綻はEUにおける深刻な問題になっている。ギリシアとEUの関係に微妙なひびが入っているといってもいいだろう。ここで「正教会」の外交カードを切ることで、プーチンはギリシアとの交友関係を深化させ、EUの結束に楔を打ち込もうとしているのかもしれない。

この視点は宗教に寛容な日本の環境にいると、なかなか見えにくい。

「日本」という限られた世界から「日本的な価値観」をベースとして「国際化を目指す」といっても的外れな結果になる恐れがある。

日本の研究者の国際感覚はどうなのだろうか。英国での８年の研究生活を終えて日本に帰国した時に私が驚いたのは、とにかく世界的権威が多いことだ。とはいっても「自称・世界的権威」だ。

もちろん、本当に世界的権威といえる先生方もたくさん日本にはいらっしゃるが、不思議とこういった先生たちは、自分のことを「世界的権威」と喧伝しない、という共通点がある。

さて、自称世界的権威は老若男女を問わず、そこら中にいる。

日本に帰国してすぐに出会ったある若手研究者は「先生、私の研究分野は誰もが興味をもつ領域ではないのです。だから私はこの研究においては世界で５本の指に入るんですよ」と自慢げに伝えてきた。その割に彼の論文は大した雑誌に載らないなあ、と思ったが……よっぽど面白くない研究分野なのだろう。ちなみに、その２年後には彼は「私は世界で３本の指に入る」と自慢していた。「はて、２人死んだのかな？」と疑問に思ったのを覚えている。まあ、彼は１週間の語学アメリカ留学のことを「僕がアメリカに留学していた時は……」とこれまた自慢げに語っていたから単なる虚言癖なのかもしれない。

これは極端な例かもしれないが……今まで日本で出会った「自称世界的権威」の先生たちの共通点がもう１つある。それはこういった自慢を必ず自分より立場が弱いと考える人にしか披露しないことだ。国際学会には当然行かない。有名大学の教授などに決して自慢もしない。自分を世界的権威と称しながら、実は「有名大学」や「教授」といった本物の権威には極めて弱いようだ。複雑だ。ただ、彼らはどうやら自分の研究分野に関して「自分は世界で一番わかっている」という内なるプライドは極めて強いようだ。

しかし自信があるのはうらやましいことだ。私は自分の研究分野についてもまだ勉強不足だなあ、と実感することが多い。研究すればするほどわからないことが多くなる気がする。

いつか、自信をもって自分の研究を極めた、と実感できる日が来ることを夢見て、今日も頑張ろう、とわが身を奮い立たせている。